

サステナブルコンソーシアム北海道

第3回 資源利用勉強会 実施報告

～ ミズダコの生態、資源状況、各地域の管理の取り組み ～

2026年8月27日（木）、サステナブルコンソーシアム北海道は「第3回 資源利用勉強会」を開催しました。北海道を代表する水産資源であるミズダコをテーマに、研究者を招いて講演と意見交換を行い、会場・オンライン合わせて30名が参加しました。

開会挨拶

開会にあたり高橋会長より挨拶があり、本コンソーシアムが発足から約1年を迎えたこと、水産資源の減少と物流の「2024年問題」が同時に進行し、多様な温度帯での物流効率化も新たな課題となっていることが述べられました。そのうえで、大きなテーマに取り組む際は「小さく始め、成功例をつくり、仲間を増やす」という三段階が要諦であるとして、活発な意見交換への期待が示されました。

講演 ミズダコの生態、資源状況、各地域の管理の取り組みなど

北海道立総合研究機構 網走水産試験場の佐野氏より、20年以上にわたるミズダコ研究の成果が紹介されました。ミズダコは世界最大級のタコで、卵から産卵までに4年以上を要します。水温10℃前後で最も成長が速い一方、20℃を超える海域には分布できずマイナス成長となるため、夏季は深所へ、秋以降は餌の豊富な浅所へと季節的に深淺移動します。また産卵には、最高水温19.2℃未満という水温条件と、閉鎖的で暗い空間をつくる1m前後の岩などの構造物が必要であることが明らかにされました。



資源状況については、北海道の資源管理目標が「中水準以上の維持」であり2024年度の漁獲量は14,393トン、資源水準は奥尻島を除く全海域で中水準以上にあることが示されました。管理は主に体重2.5～3kg未満を獲らないサイズ制限によるもので、成長が速いという生態に沿い漁業者の合意も得やすかったことが、資源が安定してきた背景にあります。地域の取組事例としてCPUE（努力量あたり漁獲量）に基づく自主ルールとブランド化により販路を開拓した苫前地区の事例と、潮流カレンダーの提供で無駄な出漁を抑制した宗谷漁協の事例が紹介されました。一方で、夏季の高水温化により海域ごとに漁場・産卵場の条件が変化しつつあり、再生産への影響が懸念されるとの指摘もありました。

意見交換

コメンテーターの学習院大学・阪口教授より、漁業者が自ら標識放流に取り組み自主管理を高度化させたキンメダイの事例が紹介され、定着性の高いミズダコでも地域ごとの取組改善により長期的な改善が期待できるとの指摘がありました。参加者からは、輸入の買い付けを背景とした単価上昇と漁獲圧の実態、産地の水揚げ動向、資源量の把握と実需者への情報提供のあり方、人工産卵床の可能性など幅広い論点が議論され、取組の横展開には漁法ごとに異なる利害を整理し、目標とメリットを共有することが鍵であるとの認識が共有されました。



コンソーシアムとしては、勉強にとどまらず産地に寄り添った取組へとつなげるべく、引き続き本勉強会を継続しながら会員間の共通認識の醸成と知見の向上を進めてまいります。持続可能な水産資源の利用は当コンソーシアムが目指す課題の一つです。引き続き、活動へのご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。